
青春

海治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青春

【著者名】

海治

N2227D

【あらすじ】

新野真空は優香と仲良くなることは出来たが、彼女の本当の気持ちはどうだったのだろうか。幼馴染の恵里菜と優香の愛犬さくらを通して、恋や進路の悩みを乗り越え成長していく真空。青春の真っ只中を生きる高校生の姿を描く青春ストーリー。

朝日に照らされて長く伸びた影が、はつきりとコントラストを付ける。それを見ていると眼がチカチカしてくる。朝から出掛ける気にならないけど、約束してしまったから仕方が無い。洗面所に行き、冷たい水で顔を洗つた。そう言えば、風呂に入つたときに髭を剃つとけば良かつた。最近少し髭が濃くなってきた。洗面台の水で石鹼の泡を立てる。掌で触り、剃り残しが無いか確かめた。眉の形を整え、また顔を洗つた。

あのわがまま娘が、朝からメールをよこしてきた。

『迎えに行つてやるからちゃんと用意しといてね。朝ご飯たべたら歯磨け』。

そんなことは言われなくても分かつて。いつも一言多い恵里菜の性格。何ともならないのは分かつてから、あえて文句は言わない。

地上143M、43階建てのマンション。最上階はメゾネットになつてゐる。バルコニーから見下ろすと人間が蟻んこのように小さくうごめいてゐる。車はおもちゃのミニカーだ。ここから落ちたうごうなるだろう。地面に到着するまでに、ちょっと時間がかかる。定番の「過去が走馬灯の様に一瞬にして頭の中に甦る」を体験しながら落下していくのだろうか。

低層棟の屋上の公園に、いつもの様に散歩してゐるおじいさんが見える。公園へは一度も行ったことが無い。公園への行き方さえ知らず、おじいさんの顔も見たことが無い。ここから見て、辛うじておじいさんであることは分かる。毎日々々何を考えて生きているんだろ。生き甲斐なんていうものがあるんだろつか。

ピンポーン。チャイムが鳴った。

「新野くん、迎えに来たよ。」

「何しに来たの？」

「いいから早く下りといで。待ってるからね。」

Hレベーターホールに向かって玄関を出た。途中の階からスース姿のサラリーマンや学生が乗り込んでくる。3階で止まると小走りで慌ただしく駆けていく。

「二ーーノ行こうぜ。」

同級生の恵里菜は先生から有の難い指令を受け、朝のお出迎いにいらっしゃった。マンションの3階から駅までテッキが繋がっている。駅方向の人波がたんたんと流れている。

連絡通路を通つて駅まで天氣を気にせずに行ける。低層部は商業施設や駐車・駐輪場、スポーツジムなんかがあり、高層部は分譲マンションで、駅前の再開発事業で完成したばかりだ。

「歯磨いたか？」

「うるせー。歯磨きは唯一の趣味だし。ほりつ。」

予想通りの質問に、用意しておいた答えを返した。二ーーノとやつて歯を見せた。

「キスしてやうりつかHリナ？歯磨いてるし、いい匂いするだ。

「

佐藤恵里菜とは幼馴染。幼稚園から一緒に、中学の一時期、話さないこともあつたけれど、高校でたまたま同じクラスになつて昔の

様に仲良くやつていて。口は悪いけど可愛らしく、すらりとしている。擦れ違った男がよく振り返つて目で追つている。可愛いと思われているのを彼女は十分分かっている。買い物などで金額以上のサービスを受けたり、男どもに親切を受けたり、美人の恩恵を被っている。そんな友達を持てたことは嬉しいけれど、不思議と彼女には恋心を抱いたことは無い。側に居て当たり前の存在だ。しかし正直言つと、そばで見ていて思わずキスしたくなつたことは、少なく見積もつて過去に一、三度ある。

通勤・通学の人々が駅のホームに溜まつていて。

- 「学校出できなよ。出席日数、余裕無いみたいだよ。」
「いいじやん。」
「何がいいの。卒業出来なくなるんだよ。まだ2学期の途中なんだから、頑張りなよ。」
「今日、何があるんだっけ？」
「進路指導よ。ちゃんと決めてきたの？」
「決まんないよ。勉強さえ何でやんなきやなんないか分かんないし。だいたい今の時点で将来何になりたいかなんて分かる訳無いだろ。」
「そんなの誰だつて悩むわよ。でも自分のことなんだからちゃんと自分で決めなさいよ。分かつてるのは、このままいけばあんたはダブリつてことよ。サボテンが、そろそろ本当にヤバイつて真剣な顔して言つてたからね。」
「お前も先生も性格は悪いけど、実はいいやつだな。アハハハ。」
「

国語担当の担任、サボテン。小太りで髪の毛が硬めで、ぴんぴん立ちまくつてる。まるでサボテンの様に。3年になつてすぐ個人面談があつた。サボテンは特に話題を見つけられず、名簿の名前を見

ながら言つた。いい名前だな。今までこの名前には出会つたことが無い。この世に生まれて最初に呼ばれるのに相応しい、希望に満ちた名前だと言い放つた。あと、お前は頑張れるやつだから、特に言うことは無い。と、ひとこと言われて終わりだつた。それ以来、サボテンには特に悪い印象は抱いていない。

新野真空。にいのまそらと読む。真空、しんくう、まことにかくつぽ。全く何にも無いという名前をいただいた。親は何を思つてこんな名前を付けたのだろう。小学生の時、親に名前の意味を聞いたことがある。宇宙のはじまりは真空から始まつた。だから全てのはじまりを意味する名前なんだとか。何の取り柄も無い今の僕にぴつたりの名前である。

「他人事みたいに言つて。もう子供じゃないんだから、学校来なくちや駄目だぞ。」

「とりあえずやることも無いし、ちゃんと行く事に決めたよ。でも進路指導終わつたら、早退するぜ。」

昨晩ずっとと考えていた。これから僕はどうすればいいんだろう。学校に通う唯一の目的だった優香も失なつた。しかし、たつた3年間の高校生活さえ乗り越えられない自分で何なのだろうか。これら何を目指に生きて行くか、残り僅かな高校生活を、それを探す時間に当ててみよつと思つた。

優香が亡くなつた。

そう聞かされた時、頭が真っ白になつた。

塾の帰り道、交通事故でひき逃げにあつた。道路を渡ろうとして車にひき逃げされたらしい。恵里菜が電話で教えてくれた。見つかつた時はまだ息をしていた。病院に着いた時点で、既に手遅れだつた。

優香と最後に話したのは、一昨日の課外授業だつた。職業体験で商店街で販売の体験をした。優香とは同じ班だつた。あまり客は来ず、もつぱら将来何になりたいか、皆でそんな話をしていた。

- 「新野君は何になりたいの？」
- 「オレは何も決まってないよ。第一、何になりたいかなんて考えたことも無い。」
- 「大丈夫？ みんな何か考えてるよ。」
- 「いいんだ俺。ゆっくり構えるタイプだから。」
- 「なんだ。じゃ大丈夫だね。」

単純で分かり易く深追いしない。だから優香が好きだった。それでも僕の答えは何て軽薄なんだろう。もうちょっと気の利いた答えが出来たはずだ。

買い物に付き合つたこと、体育祭の打ち上げで一人だけで帰つたこと、修学旅行の自由時間、同じグループで海で過ごしたこと。時間が逆戻りして何度も頭の中を駆け巡つた。優香をひき逃げした相手を恨む気持ちは不思議と湧いて来なかつた。僕の中に「死

“全ての終わり” という図式がある。前世や死後の世界は信じていない。

とにかく、もう学校へ行く理由が無くなつた。お通夜やお葬式に誘われたが行かなかつた。

それから空白の時間が流れた。

いつもの時間に起きて、本を読んだり、ネットを見たり、ギターを弾いたりして過ごす。何日経つてもその3つを繰り返し、過ごした。

一緒に暮らすのは父親だけ。ウェブ製作関連の仕事で、ほとんど家で仕事をしている。メゾネットの1階に父の部屋があり、2階は全部僕の部屋だ。父は学校でのことは何も聞かないし、学校に行かなくても何も言わない。仕事や学校のことは家族の間に持ち込まないのが主義らしい。これは、母がまだ元気な頃から同じだった。

3年前、母が亡くなつた。癌が母の体を蝕んだ。癌を発見した時には、もうあちらこちらに転移していた。母は元気を無くし、回復する兆しも無かつた。僕は父に一度だけ泣いて頼んだ。何とかして母を元気にして欲しい。母が死んだら父のせいだと。しかし、父や医師の努力もむなしく、母はあつという間に亡くなつてしまつた。

父と母は大の仲良しだった。というよりも父は母に完全に頼りきつっていた。仕事以外の身の回りのことは全て母がやつていた。父の世話を焼くのは母の生き甲斐だった。

母が亡くなると、父は呆然として過ごした。そしてサラリーマンを辞めた。下着の場所、通帳やハンコの在り処さえ知らなかつた。しばらく母に代わつて僕が世話を焼いた。1年間は魂の抜け殻にな

り、家からほとんど出なかつた。

去年、突然今のマンションに引っ越した。思い出の詰まつた家を後にして、完成したばかりの新しいマンションに移り住んだ。父は母のことを思い出すのが辛かつたのだろう。父は1年過ぎたぐらいで立ち直り、サラリーマン時代のコネを生かして、企業のサイトを製作・管理する仕事をやり始めていた。

優香が亡くなり、僕も父と同じ様に嫌な思いをすることになる。
大切な人を失つた痛み。

人の心は何故痛んだり、病んだりするのだろう。でも、母も優香も僕の心の中に生き続けている。

「 優香は何を目指してんの？」

「 私、動物好きだから、獣医かトリマーだな。犬が大好きなの。さくら知つてるでしょ。さくらと居る時が一番幸せ。さくらになら何でも話せるし、ちつとも嫌な顔しないで何でも聞いてくれるの。犬は私を幸せにしてくれるから、だからその恩返しに、犬に幸せになつてもらうの。」

「 なんかすげーな。もうすっかり決めてるじゃん。優香頭いいし、大丈夫だよ。頑張りなよ。」

さくらは優香の愛犬だ。学校から帰ると犬の散歩に出掛けるのを日課にしている。以前、一日買い物に付き合つたことがある。帰りに優香の家に立ち寄り、散歩に付き合つた。

「 時間があるんだつたら、犬の散歩に付き合つて。」

優香は一度家に戻り荷物を置くとさくらを連れて出てきた。

足が短く、目がクリッとした愛嬌のある犬だつた。「一ギー」という犬種で、さくらという名前であることを教えてもらつた。「さくら」と声をかけると嬉しそうな顔をしながら短い後ろ足を支点に寄りかかってきた。僕も犬が好きなので、リードを持たせてもらつた。後ろ姿を見ているとシッポが無いことに気付いた。

「あれ、シッポが無いんだ、この犬は。」

「そう。断尾するの。だ・ん・び。生まれたらすぐシッポをゴムで括つて血流を止めるの。そうしたら自然にシッポが落ちるでしょ。昔、イギリスの農場では取っちゃうのが普通だつたの。犬がシッポを怪我したりすると治りにくいのを知つていたのよ。」

「痛くないの、それ？」

「生まれてすぐだと、まだ神経も発達してないし、大丈夫みたい。でも、シッポは無いけど、嬉しい時は付け根の所が動くの。ホラ。」

優香がさくらを抱き上げると、さくらのお尻をこちらに向けた。シッポが付いていたであろう部分がひょこひょこと動いていた。優香がさくらにキスしようと顔に近付けたが、思いつきり顔を舐め回されていた。僕はそれを見て笑つた。

進路指導はあっさり終わった。

サボテンも分かっていた。進学するのか就職するのか。進学するなら推薦もあるし、願書のことを考えるとそろそろ結論を出すよつに。とだけ言われた。

残りの授業は受けずに、早退して帰ってきた。あとは恵里菜がうまく言つとこてくれる。

父は出掛けていた。背広やコートのポケットを叩いて小遣いを探した。父はわざと小銭をポケットに残して置いててくれる。叩いて音を聞くだけで、およその金額が分かる。まあまあ集まつたので、本を買いに出掛けることにした。

午後の日差しはまだ暑く、短い距離だけどバスで行くことにした。出来るだけ建物や木の陰を探しながら歩いた。

優香のお母さんが家の前の木陰で立ち話をしているのが見えた。側にさくらを連れている。

「お散歩に行けなくて可哀想なのよ。仕事でなかなか抜けられなくて。」

さくらのことを話しているのが聞こえてきた。おばさんも仕事をしていく、どうやら田舎者らしいのせ話をするのが難しいらしい。

「おばさん、じんじわむ。」

「あら、新野くんこんにちは。久しぶり、元気にしてた？あれから顔を見なかつたからどうしてるかと思ってたのよ。」

「ご無沙汰しています。お元気そうですね。さくらも元気そうだな。」

しゃがむとさくらが嬉しそうに近寄つて来た。お腹を見せて寝転がつた。

「 そうなのよ。元気すぎて困っちゃつて。今日は学校早かつたのね。そうだ、上がつていきなさいよ。お茶でも出すから。」

「 さくら、うちで預からせてもらつていいですか？」

「 さつきの聞こえてたのね。 そうね、さくらは不思議と新野君に慣れてるから。ほら、いつか優香と一緒にお散歩に行つてくれた時、優香が帰つてくるなり、さくらが新野君初めてなのに、いきなり慣れて普通に散歩したつてびっくりしてた。この子、意外と臆病で初めての人には懐かないんだけど。」

「 そうなんです。うちの父にも聞いてみます。父は一日家に居るし、犬好きだから。」

「 そうなの。じゃー、そうして貰おうかな。寂しくなるけど。この子、一日中お留守番で可哀想で。」

「 後で連絡します。待つててな、さくら。用事があるから、僕行きますね。」

「 あら、お茶飲んでいかなくて良かつたのかしら。じゃあね。よろしくね。」

家に上がりつて仏壇の遺影を見たら、多分自分を見失つてしまつ。

さくらがうちに来る。以前から父は犬を飼いたがっていたので、一つ返事で決まると思つ。

すぐにバスが来た。2つ目のバス停で降りると書店がある。ペストの「コーナーでコーニギーの本を選んだ。その他にもう1冊、小説を買った。クーラーが効いていて涼しかったので、しばらく本を選んで過ごした。

帰りはバスに乘らずに歩いて帰った。日が傾いて少しは涼しくなつた。恵里菜と約束したことを考えていた。

僕が学校へ行かなくなつてしばらくして彼女が尋ねてきた。言わずとも、何をしに来たか、だいたい分かった。

「二人、元気にしてる?」

「まーな。元気付けに来ててくれたのか。ご苦労様。わざわざ済まんね。」

「そう。わざわざ來たの。はい、これ。先生から預かつて來た。

「サンキュー。入りなよ。何か飲むか?」

「うん。コーヒーがいいな。温かいの。」

やかんに水を入れ、ガスに火を点けた。トレーの上にコーヒーカップ、ティースプーン、ティッシュシュガーを並べた。

優香を好きだったことは恵里菜も知っていたから、それを慰め、励ますつもりだろう。

「サボテン、何か言つてた?」

「引っ張つてでも連れて來い。本人の為だつて。」

「俺は行かないよ。優香が居なくなつたし。」

「可哀想だつたね。学校に来なくなつた理由は分かるよ。もう学校来る意味無いもんね。」

学校来る意味無いもんね。」

お湯が沸いて、やかんから湯気が立つた。コーヒーの粉を入れ、お湯を注いだ。テーブルに向かい合わせにコーヒーカップを並べた。

「二一ノが学校に出てくるのを待っている人がいるんだ。今日はそれを言いに来たの。二一ノが学校に来ないと、その人も学校に行く意味が無くなる。その人の為に学校に出てくることは出来ないかな？」

「へえ、そうなんだ。俺のことを思ってくれる人がいるんだ。物好きだな、そいつ。」

「そうでもないよ。二一ノはそれ程悪くないよ。」

「まあ、悪い気はしないけど。そいつの為に成るかどうか分からぬけど、行つてもいいよ。来週からかな。でも、誰なんだそいつ？」

「今は教えられないけど、いつか言えると思つよ。同じクラスの子よ。とにかく学校出てきなよ。」

その後、コーヒーを飲みながら、僕が居ない間に起こつた学校での出来事など、取りとめも無い話をした。恵里菜は長居をせずに帰つた。

父はまだ帰つて来なかつた。ボロネーゼのソースだけ作つておいた。父が帰つたら麺を茹でてすぐに食べられるように、お皿やフォークも出しておいた。ボロネーゼは父の大好物だ。

2階に上がり、参考書を開いて勉強をした。勉強しながらいつの間にか眠つてしまつた。

父が起しに来た時、外はもう真っ暗だつた。8時を回つていた。父はめつたに2階に上がつてこないが、食卓に並んだ皿を見て気付いたみたいだつた。

食卓に下りると、食事が出来上がっていた。父はさくらを飼つことを快諾してくれた。すぐに優香の家に電話をした。明日、父と一緒に迎えに行くことになった。

雨が激しく降り始めた。夕方、急に風が冷たくなり、雷が鳴った。父と出掛けるのは久し振りだ。最近一緒に食事に出掛けることも無い。父は仕事が順調にいっていて、忙しくなつてきている。車を運転する父の横顔は、さくらを迎えて行くことで、少しほしゃいでいるように見える。父の機嫌はすこぶる良い。さくらを飼う事が多少なりとも息抜きになるだろうと思つ。

優香の家に着き、ガレージに車を入れた。家でおばさんとさくらが出迎えてくれた。平日なので、おじさんは勤め先に出ている。さくらを預ける話をしたら、寂しそうにしていたそうだ。時々会いに行つてもいいか尋ねられた。もちろんいいですよと父が答えた。

家では優香の遺影の方を向かなによつて意識していた。しかし、父が挨拶するよつて言つた。線香をあげ、手を合わせた。

仏壇の前に座つていると自然と涙が溢れてきた。優香を感じさせる空気が僕を包み込む。怒涛の様に優香との思い出が押し寄せた。スローモーションの様に時間が流れる。

さくらが近付いて来た。手を伸ばすと、飛びついて顔を舐め回した。おかげで涙がばれずに済んだ。父とおばさんはリビングで話をしている。

帰り道、雨が上がつていた。

飼育道具一式を車に乗せ自宅に向かつた。僕は助手席でさくらを

抱えた。地下の駐車場に車を停め、荷物を抱えエレベーターに乗った。家に着くと、皿に水を入れ、飲ませた。さくらはピチャピチャ音をさせながら水を飲んだ。サークルはリビングの、父の部屋から覗ける場所に置いた。

バルコニーでさくらを遊ばせた。

優香と暮らし、優香が愛したさくらが皿の前にいる。

大好きなボール遊びでひとしきり遊ばせた後、しばらくの間撫で続けた。優香は体育祭の打ち上げの帰り、別れ際に僕にキスをせがんだ。おでこにキスをした。その後、唇と唇を合わせた。でもそれ以来、そのことに全く触れずにお互い過ごした。彼女を意識すればする程、余計に好きになつていった。しかし、キスの理由は聞けなかつた。

さくらを家に迎えた翌日、学校へ行くと同級生から、軽く無視された。初めは何のことか全く分からなかつた。恵里菜が教えてくれた。僕と恵里菜が付き合つているという噂が広まつてゐるらしい。それを聞いて笑つた。男どもの焼きもちは相当なものだ。付き合つてもいいし、それが事実だつたとしても誰と誰が付き合あうと好きな者同士の勝手だ。友達と思っていたやつまでもそうだった。ここはあえて言い訳しないで放つて置こうと思った。時間が解決してくれるまで、いつも通りに振舞うこととした。誰も恨む必要は無い。恵里菜もそういうつもりで通すと言つてくれた。

学校は学園祭の準備でごたごたしていた。模擬店の看板作りで放課後まで居残つて作業した。60年代の洋楽レコードアルバムのジャケットを参考に、目立つけれども落ち着いた雰囲気を狙つてデザインした。バンド出演が決まった。オールドインストゥルメントの

エレキギター・バンドで、サイドギターを担当した。以前から音楽好きのメンバーで自主的に練習していた。みんなの前で演奏出来るレベルになってきていた。しかし、噂のおかげでメンバーとの間もぎくしゃくしていた。いつそのこと本当のことを聞いたとしてくれれば気が楽だと思った。

わざわざ誤解を招く必要は無い。恵里菜とは距離を置いた。同じクラスなので少し面倒だった。

父も母も多くは教えてくれない親だった。聞けば教えてくれたが、あえて何かを教えるということは無かつた。ただ、決して人に心を閉ざすなどだけ教えてくれた。如何いうことなのか未だにはつきり分からない。どんな人でも受け入れる寛容な心を言っているのか、人を信じなければ人からも信頼されないということを言っているのか。それは僕なりのテーマとして考えるとして、田頃は兎に角、人に心を開くように努めている。

家に帰るとさくらが待っていた。父はさくらの為におやつやおもちゃを買い込み、サークルの中には柔らかい毛布とクッションを敷いていた。飼育環境がしつかり整えられていた。父の細やかな心遣いが微笑ましかった。優香がしたように、学校から帰るとさくらを連れ出し、散歩に出掛けた。学祭の準備で晩くなり、日が暮れ始めている。

優香の家の前を通りて歩くことにした。家に近付くと、さくらの足取りが速くなる。通いなれた道。家の匂いに惹かれて、真っ直ぐに進む。さくらにも愛しい人がいる。さくらが歩くに任せた。家の玄関の前で立ち止まり、チャイムを鳴らす。家には誰もいない。さくらを抱え、家を少し離れ、優香と歩いた同じ道を歩いて行く。途中から道を逸れ、帰り道を辿る。思い出に引き摺られてはいけない。

辛い思い出は忘れて、良い思い出で心を包み込みたい。いつの間にかマンションの田の前を歩いていく。地下へのスロープを下り、駐車場の隅に置いたケースにさくらを入れ、エレベーターに乗る。家に着くと父がフードを与えてくれた。さくらは満腹になると、水を飲み、満足そうに寝そべった。

日が落ちると雲行きが怪しくなってきた。天気予報では台風が接近し、強風が吹き荒れると言っている。

早朝、風が吹き荒れた。高層マンションは風を受けると結構揺れる。揺れて力を逃す柔構造になっている。最大30cmは揺れる設計だ。父は建設会社で構造設計の仕事をしていた。このマンションも父が設計を担当した。風向きにもよるが、最上階よりも中間階のほうが揺れるらしい。今回の揺れは相当なもので、まるで船にでも乗っているかのようだ。不安そうな顔をするさくらと田が合った。外を見ると、下から物凄い勢いで風が吹き上げている。何かは分からぬが、色々な物が飛び交っている。どうみても今日は休校だ。交通機関もしばらくは動かないだろ。

午後になると風が無くなり、晴れ間が広がった。吹き返しの風は僅かだった。辺りの空間に静けさが広がり、そこら中に木の葉や看板、訳の分からぬ物が散らばっていた。大通りに木が倒れているのが見えた。作業員がチエーンソーで木を細切れにしてトラックに積み込んでいる。

休校の連絡が有った。空いた時間、さくらと一緒に過ごした。外はまだ危なくて出歩けない。しばらくボールで遊び、朝御飯をあげた。食べ終わるとさくらはリラックスして長く伸びをして眠つた。僕は側に座り本を読んだ。さくらが寝息を立てている。なんだか幸せな気分がした。誰かが側に居るような気がしてきた。

優香は僕のことをどう思つていたのだろう。僕のことを好きでいてくれたのだろうか。それとも、ただの友達だったのだろうか。

体育祭の打ち上げは同級生のやんちゃな連中が行きつけていた居酒屋だった。

こんな店に友達同士で来るのは初めてだった。皆、酎ハイやビールを平気で頼んでいた。僕はカルピス酎ハイを頼んだ。初めてのお酒はジュースの様だった。何杯か飲んでいると調子が出てきた。体育祭をやり切った興奮がまだ続いていた。みんな大声で騒ぎ盛り上がつた。

居酒屋を出て、カラオケに行くことになつた。優香が一緒に歌おうと言つて、デュエット曲を歌つた。

随分遅い時間になり、それぞれタクシーを拾つて帰った。

帰る方向が同じだったので、優香と二人でタクシーに乗つた。一緒に帰れるのは嬉しかつた。優香は元々一学年上だつた。3年生の1学期、彼女は突然学校に来なくなり、そのまま留年したらしい。僕は彼女のことほとんど知らなかつた。

僕らが3年生になると、同じクラスに彼女が居た。同じクラスの女子に無い大人っぽさと、謎めいた不思議な存在感があつた。

家の手前でタクシーを降りた。一人歩きは危ないので、結局彼女の家の前まで歩いて送ることにした。深夜の住宅街で、周りは静まり返つっていた。自然に彼女と手を繋いだ。手の平に汗をかいなので彼女がハンカチを握らせてくれた。並んで歩いているとバニラに似た甘い香りがした。静けさで辺りの空間が固まつている。話の間が空くのが怖いので、絶え間なく会話を続けた。彼女は酔つているのだろうか。どちらか分からなかつた。

やがて家の近くに着いた。

「 シィーツ。」

と人差し指を口に当てて言った。

「 キスして。」

彼女のおでこにキスをした。彼女は目をつむり、唇を向けてきた。唇と唇を合わせた。鼻息が顔にかかる様に息を止めた。胸がキコンと苦しくなり、意外な生理現象が起きた。男がこういう場面で、こういう風になることは全く予想していなかつた。ドギマギしてし

まつた。彼女の顔をまともに見ることが出来なくなり、自分の顔がこわばっているのが分かつた。おやすみと無理に笑顔を作つて言い、その場は別れた。

次の日は休日だったので、彼女と会えたのは月曜日だった。その日は何事も無く終わった。いつも通りの一人に戻つていた。

すぐに夏休みがやつてきた。

一度だけ優香から電話があつた。服を買いに付きあつて欲しいと言われ、ショッピングモールに出掛けた。あちこちの店に入り、優香は服や小物を沢山買つた。一日中彼女に付き合つた。優香の気持ちを聞くチャンスは幾らでもあった。彼女の本当の気持ちを聞くのが何故か怖くて、結局聞けなかつた。

優香はその夏休み中に事故に遭い亡くなつてしまつた。彼女の気持ちはもう聞くことが出来ない。彼女は永遠の謎を僕に残したまま去つてしまつた。

今更何も分からぬ。しかし、これだけは言えると思う。少なくとも彼女は僕のことを好きでいてくれた。例え気まぐれだつたとしても。

部屋の窓の向こうに、今まで見たことの無い綺麗な晴れ間が広がつてゐる。普段霞がかつた空が、台風の風で一掃された。地平線の彼方まで透き通り、地球が裸になつた。

学祭の準備は驚くほど順調に進んだ。これまでクラス全員が積極的に何かに取り組んだことは無かつた。作業している1週間のうちに何故か一体感が生まれた。

恵里菜との噂は急速に影を潜め、友達との関係はあっけなく元に戻った。

秋の装いに色を変えた並木が、その葉を精一杯輝かせている。学園祭は無事に終わり、クラスの模擬店は盛況だった。自分でデザインした看板の評判は悪くなかったが、バンドの演奏は最悪だった。緊張しすぎて演奏がバラバラになり、人に聴かせられるような演奏では無かつた。まずは舞台慣れしないといけない様だ。

あれから毎日真面目に学校に通っている。三年生は受験に向けて追い込みに入り、クラスはピリピリしている。就職を希望する数名と、まだ何も決めていない僕を除いて。これから何を目標していくのか、未だに決めかねる自分に少しあきれている。

優香が残した愛犬のさくらは相変わらず元気だ。父はさくらを溺愛し、おやつの食べすぎか、少し太りだしてきた。

学校帰りに恵里菜に会った。

- 「二一ノ、最近ちゃんと出て来てるね。」
- 「ああ。もう休んでられないから。」
- 「これから秋山の所に行くの。一緒に行かない?」
- 「ちょっと無理。俺、遠慮しとくよ。」

秋山は母親が病気で入院して、人手の足りなくなつた酒屋を手伝つている。恵里菜は昔から困つた人を見捨てられない性格だ。秋山の母親が入院して以来、酒屋に足繁く通つている。

- 「酒屋手伝つてるんだって?」
- 「そう。秋山が一人で大変なのよ。お父さんも頑張つてのけど、

配達があるから。」

「 良くやるな、お前。あんまり無理すんなよ。」

「 分かってる。秋山のお母さんが明日手術だから、順調に回復すればあと一週間ぐらいかな。多分大丈夫よ。」

「 お前の大丈夫が一番心配なんだよ。」

学習発表会の時のこと思い出す。恵里菜の親友、千絵はクラスの代表に選ばれ、張り切っていた。ろくに寝ずに資料作りに頑張つたのだが、無理がたたつて熱を出した。思つたように作業が進まず、とても間に合いそうに無かつた。困つている人を見ると放つて置けない恵里菜はいつもの調子でしゃしゃり出た。ところが恵里菜まで熱を出し、千絵よりも先に倒れてしまった。倒れる直前に「無理すんなよ。大丈夫か？」と声を掛けた。あまりにも苦しそうで、呼吸するのもやつとの様に見えた。一緒に帰るように引き止めたが、彼女は「大丈夫だから、頑張る。」の一点張りで譲らなかつた。彼女はその日のうちに救急車で運ばれた。これが初めてじゃなく、似たようなことは何度かあつた。だから、彼女の「大丈夫」は全く信用ならない。

「 分かってるよ。だつて大丈夫なんだもん。」

「 何が分かってるのか、分かんないけど、とにかく無理すんなよ。」

「 じゃーね。一一〇も頑張つてね。」

「 ところでさ、お前はさ、何でそんなに人の為に頑張れるの。」

「 そんな、分かんないけど。だつて、みんなが幸せになるのはいい事でしょ。どの人も皆幸せでいられるのが私の理想なの。それをお手伝いして感謝されるのが生き甲斐かな。」

「 みんながみんな幸せに成れる訳ないだろ。競争社会なんだから。それよりもお前は自分のこと大丈夫なのかよ。」

「 そうよね。ちょっと成績落ちてるし、勉強しなくちゃいけないんだけど。」

みんなが幸せになんて所詮無理な話だ。全ての人を幸せにするなんて、自分を何様だと思ってるんだろう。恵里菜は人のことばかり心配して自分の事は放つたらかしにしている。自分の事さえ出来ないのに、何故他人の事が出来るのだろう。

進路については何の決め手も無いまま時間だけが過ぎていく。とりあえず大学に進学して、経済学部でも狙って受験に専念する。今は当たり障りの無いそんな考えが芽生え始めている。あの夏の思い出は、優香と過ごした時間は本当に現実だったのだろうか。自分で幻の出来事になりつつある。

恵里菜と別れて、そのまま真っ直ぐに帰った。

バルコニーに出て夜景を眺めた。市内の夜景が煌めいている。高層ビルの航空障害等が各々好きなタイミングで点滅している。真下を覗くと足元の薄暗い公園がブラックホールの様に全てを吸い込もうとしている。フェンス際の室外機に足を掛け身を乗り出してみた。そのまま頭を下げる、スルリと身体が滑り出した。約130メートル。5・15秒の間が永遠に感じた。

人間は何の為に生きているのだろう。生物学者が言っていた。全ての生物は、遺伝子を次の世代に渡す為に生きているのだ、と。生物は死んでも遺伝子だけは子供に引き継がれる。でもきっとそれは人間には当て嵌らないと思う。人間は遺伝子を残す以外に、人生に様々な意味を持たせていると思う。例え子供を残す前に死んだとしても。そして子供を残せも残せなくても。その後々まで人間は生きる意味を持ち続いていると思う。

さくらの鳴き声がして目が覚めた。背中にじりとじりと汗をかいていた。「はあ」と大きくため息をついた。怖い夢を見ていた。やつと起き上ると顔を洗った。お湯を沸かしながらぼーっとした頭でフライパンに卵を落とし、目玉焼きを作る。クチュクチュとした音と共に卵とサラダ油の匂いが広がった。珍しく父が朝から起き出しへきり、さくらに挨拶している。今日は出掛けののだ。

「おはようお父さん。今日は早いね。最近思うだけじゃ、さくらがひとつ太ってきてない?」

父はさくらのお腹を撫でながら、「そうだな。ちょっと太ったな。」と頷いた。話し合いの結果、おやつはしばらくお預けにすることになった。

秋山と恵里菜が欠席した。病院にいるのだろうか。きっとあいつのことだから付き添いをしているのかもしれない。

昼休み、メールがあつた。案の定、入院先の病院にいた。秋山のお母さんは術後の様子が思わしくなく、集中治療室に入っているという内容だった。

夜になり、恵里菜から電話があつた。

- 「一へ、ちょっと聞いてくれる?」
- 「どうした?」
- 「それが、秋山のお母さん、まだ意識が戻らないの。」
- 「手術うまくいかなかつたのか?」

「うん。もう、時間が経つのに、集中治療室に入つたままで。」

「その間、病院の人が出たり入つたりして。」

「病院の方から何か説明は有つたのか？」

「私は何も聞いてない。秋山君とお父さんが呼ばれて説明聞いた。でも面会謝絶で病室には入れないの。」

「秋山は何だつて？」

「何も聞いてない。だつて、何も聞ける雰囲気じゃなくて。」

「どうか。」

「今、何処にいるの？」

「待合室。」

「お前、食事とつたのか？」

「うつと。まだ。」

「ちゃんと食べないと、また倒れちまうぞ。」

「うん、分かつた。でも心配で心配で。」

「そこに居て何かやることあるのか？」

「えー。別にやる」とは無いけど。もしものことがあつたら嫌だし。

「うつと。まだ。」

「ちゃんと食べないと、また倒れちまうぞ。」

「うん、分かつた。でも心配で心配で。」

「そこに居て何かやることあるのか？」

「えー。別にやる」とは無いけど。もしものことがあつたら嫌だし。

「うつと。まだ。」

「ちゃんと食べないと、また倒れちまうぞ。」

「うん、分かつた。でも心配で心配で。」

「そこに居て何かやることあるのか？」

「えー。別にやる」とは無いけど。もしものことがあつたら嫌だし。

「うつと。まだ。」

「ちゃんと食べないと、また倒れちまうぞ。」

「うん、分かつた。でも心配で心配で。」

「うん、分かつた。でも心配で心配で。」

「うん。待合室のソファーがあるから。ちゃんと寝るから大丈

夫。」

「じゃ、無理すんなよ。」

「うん、大丈夫。」

母が入院していた時のことを思い出した。うちの両親も仲が良くて、いつも一緒にいた。母は病室で言っていた。早く良くなつて、お父さんに食事を作つてあげたいと。母の手料理を父が美味しいそうに食べるのを見るのが、とても好きだった。父の食事の心配や体の心配、家は片付いているかとか、自分のことよりも父のことを心配していた。父は仕事が終わるとすぐに病室に駆けつけて、ずっと母の側にいた。

母は体調を崩して検査入院し、そのまま入院生活が始まった。癌の勢いと抗癌剤や放射線治療の副作用で見る見るうちに弱つていった。父には仕事があったので、学校帰りに毎日病院に通い、母の面倒を見た。母は癌と闘っていた。抗癌剤の副作用はかなり酷くて辛そうだった。それでも母は良くなるつもりで必死だった。僕も治る信じていた。ひと用ぐらいすると抗癌剤の点滴が終わり、母の体調も良くなつた。食事も取れるようになつて元気が出た。外出許可をもらい親子3人でテーマパークに出掛けた。そこは両親の思い出の場所だった。父は母のことを思い続け、ついにこの場所でプロポーズしたらしい。めったにこんな話を聞くことは無かつたが、唯一聞いた結婚のエピソードだった気がする。母は本調子では無かつたが、楽しそうだった。時々休みながらゆっくり園内を回つた。

病院に戻ると、今度は激しい痛みが母を襲つた。癌が母の体を蝕んでいた。痛み止めを飲む間隔が徐々に早くなつてきた。

家族で出掛ける前の日曜日、父は担当医の先生に呼ばれ話を聞いた。母の治療の効果が無く、癌の転移が思つたよりも進んでいること、これから治療の望みは少ないと。父は母の余命を知つたとき、

それを母には告げなかつた。

母は急速に力を失つた。僕は聞かされてなかつた。でも母と一緒に病氣と闘つた。しかし母には痛み止めだけが頼りだつた。

死ぬ間際まで、きっと治るからと言い続けた。父は最後まで母の望みを断たなかつた。

秋山のお母さんの手術が終わり、5日が過ぎ、土日の休みがやつて來た。秋山と恵里菜は休んだままである。お母さんの回復の兆しはが見えないそうだ。恵里菜のことも心配になつてきたので、午前中にお見舞いに行くことにした。

駅への通路は閑散としていた。家族連れで買い物にでも出掛けるのか、小学2・3年生ぐらいの子供が両親の間に挟まって、手を繋いで楽しそうに歩いている。

受付で秋山の病室を尋ねた。さつき集中治療室を出て、個室に入つたといふことだった。病室に着くと秋山と恵里菜、秋山のお父さんがいた。

「二一ノ、今朝お母さん意識が戻つて、もう大丈夫みたい。」

「そうか、良かつたな。秋山、おめでとう。」

秋山の肩に手を掛けて回復を喜んだ。恵里菜の目に涙が滲んでいる。

「お父さんもおめでとうございます。」

「あー良かつた。本当に良かつた。ありがとうございます。」

「まだ、気を付けなきやいけないんだけど、でも先生がもう大丈夫だろうって。良かつた。」

恵里菜は自分のことの様に喜んでいる。

恵里菜は何不自由無い家庭に生まれた。姉と二人姉妹で両親は元氣だ。でも彼女は僕以上に両親に放つて置かれて育つた過去があった。自宅の隣にお婆さんが住んでいた。恵里菜は何故かお婆さんと二人で暮らしていた。恵里菜の家に遊びに行つても両親の影が無く、いつもお婆さんと一緒にいた。土日は両親の住む家と一緒に食事したが、夜になるとまたお婆さんの家に戻る。姉は両親と一緒に暮らしていた。彼女にとつて小さいころからそれが普通であつたが、自分だけ親と離れて暮らすのは何故だろう、といつの日からか不思議には思つていたらしい。お婆さんが恵里菜を甘やかすと、お婆さんが親から怒られるので、彼女は我慢を言えなかつた。自分が我慢さ

え言わなければ全てが上手くいった。いつの日からか彼女は自分したいことを口にするのが悪いことと思い始めた様だ。

秋山のお母さんが回復を見せたことで取り敢えず一安心し帰途についた。家に帰つてさくらと遊んだ。優香の愛犬さくらは相変わらず元気だ。食欲旺盛、ご機嫌でバルコニーを走り回つている。4階は屋根がセットバックしていて、バルコニーが他の階より広めになつていて。足の短いコーナーが運動するには十分な広さだ。ただ、さくらの体が最近おかしなことになつてている。前りますます太つた、と言つよりもお腹が張ってきた。水か何か溜まつているみたいに見える。お腹が横に張り出してきた。父と相談し、動物病院に連れて行くことにした。

動物病院の午後の診療は5時からだつた。待合室の椅子が埋まるくらい沢山の人人が診察に来ていた。受付でさくらの生年月日と名前、症状を聞かれた。診察券は優香のお母さんから預かっていた。さくらの掛かりつけの病院だ。

「岡田さくらさん」

優香の苗字とさくらの名前で呼ばれた。父と顔を見合せ笑い、さくらと一緒に診察室に入つた。ガラスの向こうに沢山のスタッフが走り回つてゐる。地元では評判の動物病院だ。

「こんにちは。さくらちやんどうしたのかな?これはお腹大きいね。エコーを撮りましょう。」「はい、よろしくお願ひします。」

獣医師の先生がスタッフに指示し、キャスターに乗つたエコーの機械を運んできた。

「 ちょっと横にしますね。」

スタッフの看護士がさくらの両足を抱え込んで簡単にひっくり返した。お腹にゼリーを塗り、エコーの機械を当てる。医師はモニターを覗き込みながら、機械を下腹部で上下した。

「 妊娠ですね。見えますかこの丸いの。こちらにと、こちらに。んー、少なくとも3頭は入ってるみたいですよ。もう45日は超えてますね。いつ頃ですか交配したのは?」

先生は事も無げに原因を突き止めた。

「 さあ。」

父は困った様子で答えに詰まった。事情を伝え、とりあえず出産までどうしたら良いか先生に聞いた、診察室を出て受付で妊娠犬用のフードを分けてもらい、病院を出た。

妊娠していることなど全く知らずに散歩したり遊んだりして大丈夫だったのだろうか。食欲が凄いのもこれで納得した。先生の説明によると犬の妊娠期間は6~2日前後なので、あと2週間ぐらいで出産するということになる。帰りがけに優香の家に立ち寄って話を聞いて帰ることにした。

優香の家に来た。さくらは大喜びだ。

「 ここにちは、新野です。」

「 ここにちは。どうも。ちょっとお待ちください。」

優香の父親は今日は休日の様だ。

「 じゅうしゃい。久しぶり。おー、やくら。元気か？」

さくらは撫でられると嬉しそうにお尻を振った。そして、優香の母親に飛びついて大きくなつたお腹を揺らしている。

「 やくら、どうしたの、こんなことになつて。」

お母さんはやくらの変化に気付いた。

「 それが、獣医さんに診てもらつたんですけど、赤ちゃんが出来ちゃつたみたいで。妊娠して45日は経つてるらしいです。」

「 まあ、どうしたことかしら。あなた、どうしてこんなこと？」

「 えー、どうしてってお前。そう言えばすっかり忘れてたな。そうだよ。事故があつてからすっかり忘れてたよ。ほら、さくらの発情がきた時、優香が子犬を産ませたいって、ペットショップに相談するけどいいかって、言つてただろう？」

「 そうよ。優香、自分でお世話するから、お金も自分の貯金があるから大丈夫って。さくらのことは何でも優香がしてたから。」

「 ペットショップに聞いてみよ。どこだけ。えっと、駅前の、スマイル何とかっていう。」

「 そろそろ、ハッピースマイルよ。ペットショップハッピースマイル。」

「 電話帳、電話帳。ペ、ね。ペ、ペ、ペ。有つた。えっと、何て聞けばいいんだつけ。犬のさくらの、赤ちゃんとだかい。」

「 交配よ。交配したのかどうか。多分、優香の名前で聞いたら分かるわよ。」

「 そうか。そうだな。優香のだな。よし、と。えー、あ、あつ

た。早速掛けみよ。」

「もしもし、岡田と申します。岡田優香の父ですが、犬のさくらの交配の件で。はい。えーコーギーです。そうです。はい。むかつと事情が有りまして。優香が事故に遭いました、はい。そのさくらの交配したのかどうか、はい、8月22日と25日に確かに交配していると。はい、予定日が10月22日で、分かりました。そうです。無事赤ちゃんが出来て。えー、知らなかつたもので。また、分からなこがあれば教えてください。お手数おかけします。どうも。」

「そうこうのことでした。びっくりさせて済みませんでした。こちらも突然のことで、気が動転していたもので、すっかり忘れていました。」

「いえいえ、それは当然とても大変なことだったのです、お察します。」

「でもお父さん、どうしたものかしら。優香はいないし、かといつてそんな御面倒もお掛け出来ないし。」

「お父さん、うちに生ませようよ。お父さん面倒見れるでしょ。僕も協力するから。」

「もちろんそうだな。父さんもさくらの子供見てみたいし。うちで生ませよう。よろしくですね？」

「それは申し訳ないですが、御負担でなければ、よろしくお願ひします。内分、不在の時が多いもので。新野さんにはお世話になりますが、さくらをよろしく御願いします。」

結局さくらはまづ産ませることになった。無事に済ませることが出来るだらうか。

恵里菜は就職を希望した。この数日の騒動が彼女に決断させたらしい。彼女の学力からすれば、それなりの大学に入れるし、大学に入つてから決めても全然遅くないのに。

「ところで、就職するんだって？」

「そうよ。困つてる人を助けたいんだ。みんなが幸せであることが私の理想なの。」

恵里菜は簡単に言つた。

「皆が幸せなんて、所詮無理な話だろ。競争社会なんだから。勝つやつの影には泣いてるやつが沢山いる。多少ズルしたつてやつた者勝ちって社会なんだから。」

「そうかな。でも世の中、悩みを抱えてる人だけで、目の前にそういう人がいれば放つとけないでしょ。」

「そうかも知れないけど、自分のことさえちゃんと出来ない人が何で他人のことばかり出来るのかな。不思議でしようがないよ。」

「私が頑張る事で結果が良くなれば、それでいいの。」

恵里菜は諦めなかつた。彼女の確信めいたものを感じた。

「結果が良くなれば、か。確かに。お前みたいなやつも必要かもな。偉いよ。自分を捨てても人の為にっていうのは。でも、人の為に働くのはいいとしても、その為にお前が犠牲になることは無いと思うよ。」

恵里菜は本気だった。搖ぎ無い信念を持つてゐる様だつた。彼女の場合、自分の遣りたい事に使命感さえ抱いてゐる。そんな彼女の姿が眩しく見えた。

「うん、分かつてゐる。でもその肝心の働く所がまだ決まってないんだよね。何かいい仕事無いかな。」

「介護とか看護士の仕事は？」

「そつち系はあんまり興味無いかな。そういう仕事してゐる人沢山いるし、足りてるかも。」

「そうか。困つてゐる人は病氣の人以外にもいるしな。俺も考えてみるよ。とにかく応援するし、お前なら頑張れるよ。」

「ありがとう。二ーノが応援してくれるなら、きっと私も頑張れると思うよ。」

随分涼しくなつたバルコニーをさくらが短い足で懸命に歩いてゐる。更に大きくなつたお腹が床に摺りそうになつてゐる。もはやダメージットは撤回し、フードを増やして栄養を十分与えている。おやつも食べ放題だ。

「あいで、さくら。」

大きいお腹をゆつとゆた揺らしながら歩いてくる。最近は舌を出してハアハアと息遣いを荒くして動くことが多くなつてゐる。ひつくり返つてお腹を見せるだけで苦しそつだ。お腹の重みで胸が押し潰されそうになつてゐる。お腹に手を当てるときちんがピクピクと動いて元気に成長してゐるのが感じられる。

「お腹大きくなつたな、さくら。お母さんになるのか。お前は3歳でお母さん、俺は18歳で学生か。もう追い越されたか。早い

なー。しかしあ前、ちゃんとお母さん出来るのか？子犬の面倒みて、おっぱいやんなきや駄目なんだぞ。」

お腹を撫でられながら田を細めている。僕から見ればまだ全然子供のさくらが母親になるなんて。お腹に赤ちゃんがいることを分かっているのだろうか。おっぱいが少し膨れてさくらの体はお産の準備を始めている。

優香がさくらを交配に連れて行つて以来、今日で59日目。あと3日で出産予定日だ。犬の出産と言えば安産の象徴みたいなもので、案外軽く考えていた。物の本によれば純血種の出産は意外に大変だそうである。帝王切開でしか産まれない犬種もあるらしい。コーギーの場合、人の手で介添えしてあげないと駄目な場合もあるらしい。赤ちゃんを人の手で引っ張り出してあげたり、姿勢によっては産道にひつかかつたりすることもあるので、早めに判断して病院に連れて行かなければいけない。出産のことを知れば知るほどちゃんと産ませられるか不安になってきた。出産に必要なタオルやはさみ、へその緒をくる糸、ドライヤーなど、父が早くから準備して箱に揃えてある。明日父と一緒にもう一度動物病院に出産前の最後の確認に行く事になった。

その夜は寝苦しくて眠れなかつた。「犬の妊娠と出産」という本を読み返した。コーギーの様な中型犬で5・6頭、大型犬になると1ダースも産むことがあるらしい。他にも犬の生殖や出産のメカニズム、子犬の育て方など興味深いことが書いてある。1冊全部読み終わつて尚更眠れなくなつてきたので外に出て夜道を歩いた。夜の風は何故か澄み切つていて心地良い。それにしても、優香は産まれた子犬をどうするつもりだったのか。もし6頭もの子犬が産まれたら、さすがに全部を自分の所で育てるのは無理だろう。誰か引き取り先の当てがあつたのだろうか。一度確認しないといけない。

明日にでも優香のお母さんに聞いてみよう。

「こんな遅い時間なのに、サラリーマンが家路に向かって歩いている。毎日こんな遅い時間に帰るのだろうか。遣り甲斐や生き甲斐、家庭や仕事。守るべきものを持ちながら遅くまで働いている。みんな自分の遣りたい仕事をしているのだろうか。それとも家庭の為に自分を犠牲にして、したくもない仕事をしているのだろうか。お父さんが家族の為に一生懸命に働いて、働きすぎて、逆に家族から見放されるという話はテレビなどで馴染みのパターンだ。僕に仕事と家庭を両立してやつていくだけのバイタリティーがあるのだろうか。

午前3時まで起きていたので朝起きるのに苦労した。父が朝ご飯を作ってくれた。動物病院は9時から受付開始だ。さくらはレントゲンを撮るので朝ごはんを抜いて軽く散歩して水だけ飲ませた。

病院には父と一緒に行った。受付の10分前に着いたが、病院はすでに開いていた。待合室は朝から診察に訪れた人で一杯だ。さくらのパンパンに膨れたお腹を見てさすがにみんなびっくりしていた。出来るだけ話し掛けられないようにさくらを抱えて待合に置いてあるテレビの画面を見つめた。それでも遠慮知らずのおばちゃん達はすぐに声を掛けてくる。

「まあ、お腹大きいわね。赤ちゃん生まれるの？」

当たり前だ。こんな元気な顔してこんな巨大なお腹を抱えた犬は妊娠犬以外ないだろう。おばちゃんは太って、目のぎょろりとしたパグを連れている。おばちゃんそつくりだ。

「そうです。今日は出産前の検査に来たんですよ。」

「 そうなの、大変ね。この子も赤ちゃん産んだんだけど、大変だつたのよ。5頭も生まれちゃって。おばちゃん三日三晩付き添つて、やっと生まれたんだけど、それが可愛くて、手放す前に情が移つちゃって・・・」

誰もそこまで聞いていない。仕方なく相槌を打ちながら上の空で聞いていた。それとなく回りを見回すと飼い犬と飼い主が驚くほど似ている。パピヨンを連れている派手なおばさん、フレンチブルを抱えている小太りのおじさん、チワワをかごに入れて大切そうにしている女子大生風のお姉さん。顔や犬の持つ雰囲気が飼い主にどこか似てるのだんだんおかしくなってきた。そんなことを考えていると名前を呼ばれた。

「 こんなにちは。今日はレントゲンですね。連れて行きますので、しばらくお待ちください。」

さくらをあずけると再び待合室で待つた。

5分もすると再び呼ばれた。

「 いらっしゃい。

病院のスタッフに促され、父と中に入っていく。先生がディスプレイの前でパソコンを操作し、画像を調整している。

「 8頭ですね。」

先生は画像に映る子犬の頭と脊椎を丸く囲みながら説明した。上からと横からの2枚の映像が映っている。

「 産道の幅も十分ですね。赤ちゃんも十分大きく育っています。
ただこの1頭だけ小さいですね。」

「 小さいというと。」

「 栄養が十分吸収しきれてない可能性もありますね。沢山入る
と中にそういう子がいることもありますね。珍しく無いことです。」

「 分かりました先生。3日後が予定日なのでどうぞよろしく御

願いします。」

父がやきもきしながらも先生に聞いた。

「 もう体温を測つてくださいね。犬の平熱は38度ちょっとで
人より高いです。出産直前は体温が下がります。その他いきんだり、
破水したりとか出産の兆候があれば連絡ください。」

「 夜でも連絡取れますか？」

「 ええ、転送になりますが、繋がりますので。」

「 それでは、先生よろしく御願いします。ありがとうございました。」

した。」

赤ちゃんが8頭。お腹が大きいはずだ。ずつしり重いから
には8個の新しい命が宿っている。

「 岡田さん、岡田さんいらっしゃるさん。」

「 はい。」

「 3千円になります。出産の時は御連絡くださいね。」

「 初めてなもので、よろしく御願いします。」

「 お大事に。」

秋晴れの空がどこまでも高く突き抜けている。あの青の向こう側
には無限の宇宙が広がっている。僕の運命が如何なっても宇宙の成

長にも時間の経過にも全く関係ない。僕が死んでも世の中何も変わらない。僕はこの手で優香の残してくれた子犬を絶対に無事に育ててみせる。新しく生まれてくる命を決して無駄にはしない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2227d/>

青春

2010年10月8日22時32分発行